

2 コラム RAMPWAY
泉 麻人

特集 **ベイエリア**

5 **ロジスティクスがまちをつくる**
流通経済大学 流通情報学部 教授
苦瀬博仁

9 **メガシティ東京を支える**
東京臨海高速鉄道株式会社 代表取締役社長
飯尾 豊

13 CHALLENGE
メンテナンス人材の育成

14 Taste of the Season
森下典子

16 **首都高HEADLINE**

18 business essay
アイデアを生むのは旅か風呂か
慶應義塾大学大学院 経営管理研究科 教授
松下幸之助チャレンジャー基金 教授
大林厚臣

20 つくる人まもる人
首都高メンテナンス神奈川株式会社
小田桐直幸・福島 満

22 高速百景 中野正貴

cover photo by Kōji Arimitsu
contents produced by
Metropolitan Expressway Company Limited



illustration by Takao Nakagawa

column | RAMPWAY 27

首都高名所案内

川崎大師の 酒合戦

コラムニスト
泉 麻人

首都高の1号羽田線で横浜方面へ向かうとき、羽田を過ぎて多摩川を渡るとすぐに大師の出入り口がある。降りた交差点の所は大師河原と表示されて、この辺が多摩川河口部の広い河原だった頃の景色が想像される。

次々と撤去されていく昨今、工場群の間をぬけていく単線の線路の佇まいはどことなく郷愁を誘う。また、近頃は周辺の金属や化学系工場の夜景をSFセンスで楽しむ「工場萌え」と呼ばれるマニアもいる。

この辺から東京湾にかけては、いわゆる京浜工業地帯の中心部で、所々に工場へ出入りする貨物線の線路が通っている。東京の臨海部から貨物線が

されていた。大師河原の名主・池上太郎右衛門（大蛇丸底深）と江戸から来た医者で儒学者の茨木春潮（地黄坊檀次）の酒飲み合戦に端を発するもので、いまは地元の有志たちに受け継がれている。

さて、夜光の源でもあるこの地の主、川崎大師。僕はこれまで一度も参詣したことがない。今回、「大師」テーマの原稿を依頼されて、ちょっと時間の余裕ができた10月中頃の日曜日、ふらっと首都高を走って行って見たら、門前で奇妙な催しをやっていた。戦国武将の姿に身を包んだグループが、特設舞台の両側に陣を取って、大仰な口上を述べた後、代表者が出て大盃で酒を競うように飲み合っている。もたらしたチラシに「水鳥の祭」と出ていたが、水鳥はサンズイ（シ）にトリ（西）で、つまり「酒」をシャレたのだ。江戸中期の慶安2年（1649年）に始まる、歴史深い祭典らしい。

衣装に加えて、大根役者じみた仰々しいメイクが目にとまる。口上を聞いていると、この日の参加者の多くは地元の信用金庫の職員のようなのだが、なかに1人、芸人風の女性がいて、「ほれ、吸いこめ、吸いこめ〜」なんて掛け声をあげて対戦者たちを煽る。境内に聳える赤金色の五重塔や白垂のインド仏院調の薬師殿……華やかな川崎大師の景観になじんだ催し、とも思われた。

そうか……このお祭りの話、町歩きの手本書の一つになっている種村季弘氏の「江戸東京（奇想）徘徊記」に記述

いずみ あさと / 1956年、東京都新宿区生まれ。慶應義塾大学商学部卒業。79年、東京ニュース通信社に入社。『週刊TVガイド』などの編集者を経て、フリーのコラムニスト。近著に『大東京23区散歩』（講談社）がある。